

論文

日本資本主義精神論争史の再検討

——内藤莞爾・大塚久雄・富永健一の貢献を中心に——

川口 順

〔抄録〕

1940年代から1990年代頃にかけて、じつにM. ヴェーバーの「資本主義の精神」をめぐる俗流解釈が幅を利かせていた。本稿では、①大塚久雄による土屋喬雄批判(1964/1965)、②内藤莞爾による旧稿(1941)の改稿(1968)、③富永健一による既往論点の整理と近代化理論の定式化(1990年前後～1998年頃)の3点を、「日本資本主義精神論争」史上の画期的な転轍点(ターニングポイント)として提示する。先達の仕事は、その貢献にもかかわらず必ずしも十分に評価されてきたとはいえない。

「日本資本主義精神論争」はまた、日本におけるヴェーバー受容史と軌を一にしてきた。ヴェーバーの諸論考は、常に他の著作群との「相互補完関係」(折原浩)を念頭に置いて丹念に読まないで、真意を読み損ねてしまう。それゆえかつての俗流解釈が復活を遂げ、亡霊のように我々の周辺を徘徊する事態にいつ出くわさないとも限らないが、これを憂え放置してばかりもいられない。異常を異常として認識し、地道にかつ果断に繰り返し糺し、このまじからぬ事態を打開していくことこそ、ヴェーバーに学ぶ者全てに与えられる責務であろう。

キーワード：日本資本主義精神論争, 内藤莞爾, R. N. ベラー, 土屋喬雄, 大塚久雄, 富永健一, 貢献

はじめに 背景と動機

19世紀後半から20世紀初頭にかけて日本は、東(南)アジア圏のなかで一早く近代化ないし産業化を遂げたといつてよからう。日本の近代化・産業化・近代資本主義制度の受容-移植からその形成-発展に至る過程を研究テーマに選んで論じる者にとって、マックス・ヴェーバーの「資本主義の精神 *der Geist des Kapitalismus*」(初出1904/5)概念は、最も重要かつ

興味深いキーワードの一つであるに違いない。しかしこの概念は、すぐのちに述べるように今もって誤解が絶えず、正しくとらえられていないという難点を抱えている。

当該テーマ（群）との関連でヴェーバーの「資本主義の精神」を引用する論考は、社会学に限らずとも社会諸科学の分野においておびただしい数にのぼる。が、それらの一部に共通してみられるのは、これからみるように、極端にいえば安易にも参照範囲を「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」（1904/5; 1920, 以下「倫理と精神」と略記）と「儒教と道教」の第8章結論部「儒教とピューリタニズム」（以上『宗教社会学論集』第1巻（1920）所収）のみに限定するあまり、「資本主義の精神」概念を誤解している点ではないだろうか。

またこうもいえよう。ヴェーバー自身「倫理と精神」において「資本主義の精神」に対しておこなった概念規定はあくまでも「暫定的な *provisorisch*」⁽¹⁾ [MWGI/18: 185, 256] ものでしかなかった。にもかかわらず、このことをきちんと抑えた上で当該テーマについての持論を展開している論考は少ない、と。

これは一つには、邦訳書①大塚単独訳（1988/1989）と②大塚・生松^{いきまつ}訳（1972）の市場性^{しやうじやうせい}が、③森岡^{きんが}訳（1970）、④木全^{きまた}訳（1971）、⑤深沢^{ふかさわ}訳（1983）、⑥深沢改^{いひかへ}訳（2002）、⑦古在^{こざい}訳（2009）のそれに比べて格段に大きいこと、従って後五者（③④⑤⑥⑦）が前二者（①②）ほど手に執られる機会に乏しく読み親しまれていない実態が、少なからず影響しているのかもしれない⁽²⁾。

それはともかくとして、そもそも、ではなぜヴェーバーが提唱した「資本主義の精神」概念に対する誤解がわが国——だけでなく他国でも——でいまだにはびこり、その正しい把握が妨げられているのだろうか。その発生原因はどこにあるのだろうか。このことがずっと気になっていた筆者は、「日本資本主義精神論争」⁽³⁾に着目した。上述の疑問に接近するには、まずその論争史をたどるのが正攻法と考えたのである。

I ヴェーバーの「資本主義の精神」

ヴェーバーが西欧近代資本主義（文化）の特質を「資本主義の精神」という概念でもって説明したのは、「倫理と精神」においてであった。ヴェーバーは「倫理と精神」で「資本主義の精神」を、「一つの「歴史的個体」(*historisches Individuum*)——別言すれば、歴史的現実における諸関連からなる一つの複合体でなければならない」[MWGI/18: 149] [梶山訳安藤編：87, 強調原文]と書いた。ここで重要なのは、「資本主義の精神」が理念型 *Idealtypus* 概念としてとらえられている点である。「倫理と精神」とほぼ同時期に『社会科学・社会政策雑誌』に掲載された「社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」」論文（1904）においてヴェーバーは、「この {理念型として構成され統一された} 思想像は、概念的に純粋な姿では、現実のどこかに経験的に見いだされるようなものではけっしてない。それは、ひとつの^{ユート}

ピアである」[WL7: 191] [富永・立野^{たつの}訳 折原補訳: 113, {} {} 引用者]と説明していた。

「倫理と精神」に戻ろう。ヴェーバーは理念型になぞらえ「資本主義の精神」について次のように書いている。2ヶ所続けて摘記する。

「正当な利潤を職業(使命)として、組織的・合理的に追求する精神的態度(Gesinnung)を、ここに暫らく「(近代)資本主義の精神」と名づける」[MWGI/18: 185] [梶山訳安藤編: 114, 強調原文]。

「近代資本主義精神——のみではなく近代文化の、構成的要素の一つである、職業観念を基礎とする合理的な生活態度は、基督教禁欲の精神から生まれた。——この論文はこのことを証明しようとしたのである」[MWGI/18: 484f.] [梶山訳安藤編: 355, 強調原文]。

これらの一文は、じつにヴェーバーが「経済制度としての資本主義が宗教改革の産物である」といったような、馬鹿げた空論を、我々は主張しようとしているのでは決してない」[MWGI/18: 255f.] [梶山訳安藤編: 168, 強調原文] ことと何ら矛盾を生じない。以上から、ヴェーバーが西欧近代資本主義(文化)発展の直接の要因を、なにがなんでも「資本主義の精神」のみ帰属しようとしたのではないことは明らかであろう。

いいかえれば「資本主義の精神」の比重は、ある程度出来あがった西欧近代資本主義(文化)の発展をことごとく促進する精神にではなくて、近代資本主義(文化)を創出(!)する途上であって、担い手が懐いていた(とヴェーバーがみなした)組織的合理的な生活態度にうち支えられた精神にこそ置かれている。こうした生活精神の淵源を禁欲的な諸教派に特有な経済倫理のなかにみいだしたヴェーバーは、あくまでもそれを体現した人物の「例示 Veranschaulichung」⁽⁴⁾ [MWGI/18: 150] [梶山訳安藤編: 89, 強調原文]として、「宗教的なものとの直接の関係を全然有たず von aller direkten Beziehung zum Religiösen losgelöst」[MWGI/18: 150] [梶山訳安藤編: 89, 強調原文]と断ったうえで、かのベンジャミン・フランクリンの「時は金なり」「信用は金なり」の一節を引用したにすぎない。発展に、ではなく創出における「精神」。この点を認識せずして「資本主義の精神」を正しく理解することは到底不可能であろう。もちろんこの点は、後章で論ずる「日本資本主義精神論争」においても同様である。

次に、ヴェーバーがその生涯をかけた問題設定は、この一文に凝縮されている。「近代西欧の文化世界に生をうけた者ならば、普遍史的な諸問題を取り扱うにあたって、当然つぎのようなかたちで問いを立てることが許されるだろう。発展の過程をつうじて普遍的な意味と妥当性を得た文化現象が——すくなくともわれわれはそう考えるのだが——ほかならぬ西欧の土壤のうえに、しかもそこにだけ現われたのはなぜなのか」[MWGI/18: 101] [濱島^{はましま}・徳永訳: 170,

強調原文]。またヴェーバーは「資本主義的 {kapitalistisch}」経済行為ということばを、さしあたりわれわれは、交換というチャンスを利用して収益を期する行為、つまり（形式的意味で）平和的な営利チャンスにもとづく行為、という意味に限定しておきたい [MWGI/18: 106] [濱島・徳永訳：173, 強調原文, {} 引用者] と定義した。さらにヴェーバーは次のように書いている。重要なので2ヶ所摘記する。

「本稿『倫理と精神』で「資本主義の精神」という概念を用いるのは、こうした特殊な意味においてである。勿論それは、近代資本主義の精神である」 [MWGI/18: 156f.] [梶山訳安藤編：92, 強調原文, {} 引用者]。

「資本主義」は、シナ、インド、バビロンにも、古代にも中世にも存在していた。しかし後に見るように、これらの資本主義は、右に述べた {フランクリンが有していた} 特殊の倫理的性格 Ethos を欠如していたのである」 [MWGI/18: 157] [梶山訳安藤編：93, 強調原文, {} 引用者]。

われわれは、ヴェーバーが上掲のごとく「資本主義」一般と「近代資本主義」を概念上全くの別物ととらえていたことに、つねに注意を払わなくてはならない。

さきにみたように、ヴェーバーは「(近代) 資本主義の精神」概念をそれ自体として“西欧においてのみ”固有なものとし、極めて重要な位置づけを行った。しかし、「かりに禁欲的プロテスタンティズム X₁ がなかったとしたら、近代資本主義 Y は、はたして「実験群」としての西欧文化圏において] 発展しえたであろうか」 [富永・立野訳 折原補訳：246, 強調, [] 原文] と問わずして、「(近代) 資本主義の精神」の固有性を主張することができないのは道理であろう。そこでヴェーバーは、中国やインドなど「文化圏比較」⁽⁵⁾ [富永・立野訳 折原補訳：246, 強調原文] ともしうべき「世界諸宗教の経済倫理」シリーズ (1916-1918)⁽⁶⁾ を『社会科学・社会政策雑誌』上に連載していく。

ヴェーバーは「(近代) 資本主義の精神」との関連で「儒教と道教」結論部で次のように書いている。

「中国人は、十中八九は、日本人と同じくらい、いやたぶんもっとそれ以上に、近代の文化地域において技術のうえでまた経済のうえで完全な発展をとげた資本主義をわがものとする能力があるかもしれないのだ。中国人がこうした要求にはもしかすると生まれつき『天分がない』のではないかなどということは、明らかに全然考えられないことだ。しかし、西洋にくらべて外面的には資本主義の成立に幸いするきわめてさまざまな事情があったにもかかわらず、資本主義は中国においてつくりだされたことがない {後略}」 [MWGI/19: 476f]

[木全^{きまた}訳: 411, 強調原文, } } 引用者]。

「つぎの点はほとんど拒絶しがたいとおもわれる。それは、[中国人の]『心的態度』
»Gesinnung«, いまのばあいについていうと、現世にたいする実践的態度、の基礎的な諸特
徴は、——それはそれでその展開過程においては[中国の]政治的・経済的な運命もそれら
の特徴決定の一因であったことがどんなに確実であったとしても——、それでも、こうした
心的態度の自己法則性 *Eigengesetzlichkeiten* に帰せられるべき諸作用も事実また[中国に
おいて近代的資本主義が発生するのを]阻止するのにあずかった有力な一因であったのだ、
ということである」[MWGI/19: 478] [木全訳: 412, [] 原文, 二重下線強調引用者]。

ここでヴェーバーは重要な主張をしている。ヴェーバーは中国人の「資本主義をわがものとする能力」を否定したわけではないが、ただしそれは「完全な発展を遂げた資本主義」という意味においてである。ヴェーバーはまた、中国人の「心的態度」に対して禁欲的プロテスタンティズムを信奉する信徒のそれとは質を異にしているとみなした。補足すると、その「心的態度」は中国の政治的・経済的な運命——たとえば「述べて作らず」《論語・述而第七》に代表される伝統主義や文人偏重主義、人間関係優先主義そして家産官僚制等々——によって制約されつつ、そしてかつその旺盛な「資本主義をわがものとする能力」の芽を自ら摘みもして、近代的な資本主義の「発生」(木全)へと至る道を阻止する要因となった、と。

では、ヴェーバーが「資本主義をわがものとする能力」において中国人と共に引合に出された日本人についてはどうなのか。章を改めて敷衍しよう。

II 「日本資本主義精神論争」

ヴェーバーは西欧近代の文化的意義を問うにあたって(近代)資本主義に焦点をあて、その創出過程において担い手側に定着していた組織的合理的な生活態度の淵源が、禁欲的プロテスタンティズムの経済倫理にあると「倫理と精神」で主張した。つづく「儒教と道教」でヴェーバーは、それら二大宗教が(結果として)中国における近代資本主義の発生を阻害する要因たりうるとみなした。

両論文のみから導出される誤った法則的知識をもってすれば、極論は次のようになる。すなわち近代化を遂げた日本の場合には事情が違って、「資本主義の精神」は西欧の専売特許といえないのではないか。現に徳川幕府は朱子学を国の基^{もと}としたから、ヴェーバーの「宗教」分類上は一応儒教の範疇に含まれる。儒教に固執せずとも仏教その他の影響を受けた思想的派生物の寄与なくして、日本資本主義の精神もなければ日本近代化も成立するはずがないだろう、云々。ありていにいえば、なにが日本の資本主義(化)を強力に後押しした宗教的淵源なの

か⁽⁷⁾、という無意味な問いである。

今日の学問的水準——後述——からすれば上記の極論・問題設定の仕方は本末転倒以外の何物でもない。が、この種の極論・問題設定は一時期大真面目に議論的になっていた。日本の近代化・産業化・(近代)資本主義制度の受容を、ヴェーバーの「(近代)資本主義の精神」論とのかかわりにおいて解明しようとする学問的潮流のなかでたたかわされた議論・営為を「日本資本主義精神論争」（以下断らない限り「論争」と略記）と総称するとき、[河田 1910]が論争史⁽⁸⁾の嚆矢として位置づけられよう。河田の仕事は単にヴェーバーや W. ゾンバルトら「資本主義的精神」をめぐる論客を紹介するにとどまらず、国民を啓蒙するもの⁽⁹⁾でもあった。河田は次のように書いている。

「資本主義的精神ハ元ヨリ之レ一種ノ倫理觀ナリ、即チ倫理觀ナルカ爲メニ能ク一世ヲ支配シ之ヲ標準トシテ以テ當今ノ時代ヲ前代ト區別シ又將來ノ時代ト區別スルヲ得ルナリ」[河田 1910: 2f.]。

II-1 内藤の戦前論文（1941）と R. N. ベラーの論考（1957）との関係

論争史の転軸点について議論する前に、内藤が戦前に書いた論文（1941）と R. N. ベラー（以下ベラーと略記）の論考“*Tokugawa Religion* 徳川時代の宗教”（1957）との関係についてふれておきたい。

まず事前知識として、「宗教と経済倫理—浄土真宗と近江商人—」（[内藤 1941]）はあくまでも内藤の卒業論文であり、これが日本社会学年報『社会学』第 8 輯に掲載された、という点をおさえておこう。

内藤はこの論文で、「西歐の宗教學者の謂ふ如く、佛教は遁世的宗教（*weltablehnend*）であり、現世的生活とは相反的、若しくは無關係なものであると観るのは正しいであらうか」[内藤 1941: 245]と疑問を呈し、ヴェーバーを意識して次のように書いている。

「マックス・ウェーバーは東洋人にはこの様な職業を義務とする倫理的性格を欲いてゐると主張する。蓋し支配階級の道德は凡そ「職業倫理」とはかけはなれたものであり、下層階級の職業は道德とは無縁なものであるからとなすのは、支那に於ては或ひは妥當するかもしれないが、我等の場合には正に不當である」[内藤 1941: 257, 強調原文]。

確かにヴェーバーは「ヒンドゥー教と仏教」で「十三世紀のはじめに創設された真宗はある意味においては西欧のプロテスタンティズムと比較されることが出来る。すくなくとも、それが一切の善根（偽聖）をしりぞけて、ただ阿弥陀仏への信仰帰依の唯一の意義をとくかぎりにおいてそうである」[MWGI/20: 443f.] [古在訳: 404]と書いてはいた。ここで極めて重要なのは、そもそも内藤が、（浄土真宗の教理となじむところの少なくない）近江商人の経済倫

理のなかにヴェーバーの「資本主義の精神」の追随根性 (Epigonentum ものまね 劣化コピー) を見いだすことに主眼を置いていない点である。現に内藤は、(尾高邦雄にならい)「職業は職分、天職、營利の三つの意味を有つてゐる」[内藤 1941: 286] とし、プロテスタンティズムでは天職と營利が、(代表的な) 近江商人では天職と職分が、それぞれ「職業生活の宗教倫理的意義」[内藤 1941: 286] をなしていると考え、両者の差異を指摘していた。また「彼等 {オランダのカルヴィニスト} にあつても、日常の勤勉なる労働は無制限の義務であつたが、營利義務は制限されてゐた。職業は第一に隣人愛の手段^{カリタス}であり、その後私的な利潤の手段であつた。そこではそれは生計に必要な標準により制限された⁽¹⁰⁾」[内藤 1941: 283, ルビ原文, {} 引用者] と書き、ヴェーバーの「資本主義の精神」をめぐる行論に疑問を投げかけてさえた。

さて、ベラーの “*Tokugawa Religion* 徳川時代の宗教” (1957) は、「日本の宗教のうちで、何がプロテスタントの倫理と機能的に類似しているか」[Bellah 1957: 2f.] [堀・池田訳: 29] を問題とした論考である。ベラーはプロテスタントの倫理と機能的に類似しているいわば代替物／同等品を石田梅岩の石門心学に求めていたのだが、その立論においてベラーが依拠したのが、先に見た内藤の戦前論文 (1941) である。ベラーの論考は、日本における近代化と宗教をテーマとした研究史はもとより、「日本資本主義精神論争」史においてもマイルストーン的な位置づけにある。ただ内藤の観点に立てば、自身の戦前論文はあくまでも卒業論文の域を出るものでなかったにもかかわらず、期せずしてそのままベラー論考の出汁^{だし}に使われてしまった、ということになる。この点は後述する。

話を戻そう。上記したベラーの問題の立て方は、ヴェーバーが「ヒンドゥー教と仏教」で書いた次の文脈と真っ向から対立する。

「日本の仏教および日本の宗教一般はそれ自身において多大の興味をよびおこすにもかかわらず、ここでは我々はそれを簡略に付言するだけにとどめておこう。なぜならば、我々の行論にとって重要であるところの日本の生活法の「精神」の諸特性は、宗教的契機とは全然別個な事情によってうみだされたからである。この事情というのはすなわち政治的および社会的構造の封建的な性格にほかならない」[MWGI/20: 433f.] [古在訳: 397f., 強調原文]。

「かくて日本は、資本主義の精神を自分のうちから創造することはできなかつたけれども、既製品として外部から比較的なたやすく資本主義をうけつぐことができた」[MWGI/20: 439] [古在訳: 401, 二重下線強調引用者]。

内藤にしてみれば、自分の論文——旧帝大の学部卒業論文——が本人の意図したところとは

違ったかたちで脚光を浴びることになったのだから、その心境は複雑であったろう。後年、ヴェーバーに対する誤読そしていわば似而非機能主義的な論点が、日本と同様米国ほか複数の国々の研究者・論客たち⁽¹¹⁾の間でも——部分的に——共有され拡散していくことからすると、この種の問題を取り扱おうとするにあたってはつねに、曲解や誤読を惹起させる土壤が孕まれているのではなかろうか。総じて、内藤の戦前論文とベラーの論考とは、じつに上述のような関係にある。

II-2 論争史上第一の転軸点 大塚久雄による土屋喬雄批判（1964/1965）

論争史を俯瞰すると、転軸点は3点存在している。ここでは最初の転軸点を取りあげる。その前に、伏線として〔土屋 1964〕を挙げておきたい（土屋伏線とよぶ）。土屋は、江戸時代の商人ないし「資本家的経営者層」の精神のなかにヴェーバーの「資本主義の精神」を読み込み、精神には儒教的価値観からなる「君子型」と「小人型」があると主張し、ヴェーバーの「資本主義の精神」を賤民資本主義の域を出ないものと貶価した。（薄利多売を旨とした営利一辺倒とは異なる）「君子型」を擁している江戸期商人のほうが西欧型よりも「資本主義の精神」として価値的に優れているとヴェーバーを批判したのである〔土屋 1964: 46ff.〕。土屋伏線は、〔大塚 1964〕により土屋に対する批判の形をとってすぐさま回収される。大塚は土屋のヴェーバー批判に対して次のように反批判⁽¹²⁾した。いくつか列挙する⁽¹³⁾。

「近時ヴェーバー理論の実証的批判と銘うって公刊された、土屋喬雄博士の著書「日本経営理念史」（昭和 39 年、ダイヤモンド社）〔→日本経済新聞社〕のうちに見出されるヴェーバー理解の水準にかんがみて、とくにこのこと〔比較は当事者の論攷に即して行われなければならない、誤読や誤解といった先入主見からはなれ、自身の立場から自主的に問題を読み取っていく必要があること。転じて原著者ヴェーバーが設定した「資本主義の精神」の語義・意味内容を、比較者（文脈上は L. プレンターノだがこの注では当然土屋も含まれる）が無視／排斥し、自身が構成した語義・意味内容に沿って批判を展開しながら、そのじつ批判の体をなしていないこと〕を強調しておきたい」〔大塚 1964. 10: 3, 〔 〕 引用者〕。

「この点〔篤志家ヤコブ・フッガーにおいて「倫理」と「営利」の結びつきは外面的なものにとどまり、内面的に媒介しあっていないため、ヴェーバーのいう意味における「資本主義の精神」と呼ぶものではないこと〕に徴するとき、最近公刊された土屋喬雄博士著『日本経営理念史』日本経済新聞社（とくに、その「はじめに」および第 3 章）に紹介されているヴェーバー学説なるものが、とんでもない誤読だということが判かるであろう。もっとも、土屋博士のヴェーバー誤読はその他数多いが、ともかく、実証的批判という正当な学問的作業が、こうした誤読に基づいておこなわれていることは、まことに残念というほかはな

い」[大塚 1964. 10: 13, 強調原文, 二重下線強調引用者]

「この点 「営利慾」は「営利」が勝れた意味で「自己目的」となることはないが、フランクリンの処世訓の場合は事情が異なり、「営利」が勝れた意味で「自己目的」となる。ヴェーバーがこうしたものを「資本主義の精神」と呼んだこと¹に照らせば、土屋喬雄「日本経営理念史」51-60頁にみえるヴェーバー批判がきわめて皮相的な読み方の上になっていることが容易にわかるであろう [大塚 1965. 1: 49, ¹ および二重下線強調引用者]。

「近代的な産業資本主義の生誕に対抗して古い商人資本主義が産業経営を開始したり、近代的な産業資本主義の確立に適応して古い商人資本主義がその性格を変えたりすることを、ヴェーバーは決して否定しているのではないのである。²この点は、いわゆる後進国における産業資本主義の発展を研究するにさいして重要な意味をもつことになるのであるが、通常甚だしい誤解があるように思われるので、念のために一言しておく」[大塚 1965. 1: 56, ² および二重下線強調引用者]。

本稿は、大塚によるこれら即時的な土屋批判をもって論争史における第一の転軸点と認め、その貢献⁽¹⁴⁾を高く評価するものである。

II-3 論争史上第二の転軸点 内藤莞爾自身による改稿 (1968)

ここでは論争史上第二の転軸点をとりあげる。第二の転軸点とは、内藤が後年、自身の戦前論文 (1941) を改稿 (1968) していることである ([内藤 1968])。内藤は書いている。

「ヴェーバーは、³およそ東洋人には、職業義務 (Berufspflicht) ⁴→Berufspflicht) のような倫理化は見られないという。そのわけは、支配階級の道徳は、「職業倫理」とはかけ離れた存在であった。また下層階級の職業は、道徳とは無縁のものだった、からである。ヴェーバーの「東洋人」は、そのモデルを中国人に求めている。それで古典的中国人の場合、あるいはこれが妥当するかもしれない。けれども日本人、特にわれわれが問題としている近江商人の場合、はたしてこの決めつけかたは、当をえているであろうか」[内藤 1968: 31f., ³ ⁴ 引用者]。

ここで重要なのは、改稿に伴い内藤の主張が明らかにトーンダウンしていることである。かつての「支那に於ては或ひは妥当するかもしれないが、我等の場合には正に不當である」[内藤 1941: 257, 二重下線強調引用者]が、「古典的中国人の場合、あるいはこれが妥当するかもしれない。けれども日本人、特にわれわれが問題としている近江商人の場合、はたしてこの

決めつけかたは、当をえているであろうか」〔内藤 1968: 31f.，二重下線強調引用者〕に改められ、語気から角がとれている。

内藤が戦前の論文でエルンスト・バインスの業績を引用しつつ大塚の書評への参照を指示してもいたことからすると（本稿注参照），内藤はそののちも絶えず大塚の論考に眼を通していたことは大いにありうる。〔土屋 1964〕そして〔大塚 1964. 10〕〔大塚 1965. 1〕〔大塚他 1965〕と読み進める過程で内藤は、ヴェーバーの「資本主義の精神」をめぐる論争に対する自身の認識を新たにしたのであろう。ちなみに改稿の2年前にあたる1966年に〔堀・池田訳 1966〕——〔Bellah 1957〕の邦訳書——が出版されているが、このことも内藤が改稿を決意した社会的動機のひとつといえるのかもしれない。というのも、内藤はベラーの邦訳本でおそらく初めて自身の過去の論文がベラーの業績の下敷になっていることを知ったとおもわれるからである〔Bellah 1957: 117ff.〕〔堀・池田訳 1966: 176ff.〕（第5章 宗教と経済 2 商人階級の経済倫理）。内藤はこの点について、改稿に際し「実はおもはゆい気持のほうが強い」〔内藤 1968: 3〕と心情を吐露している⁽¹⁵⁾。

上述の通り内藤が、一方では自身の戦前論文とベラーの論考との関係を、他方では土屋のヴェーバー批判に対する大塚の反批判から自身の立ち位置を再認識した経緯を踏まえ、旧稿を改稿するに至ったと見てよからう⁽¹⁶⁾。

本稿はこの、内藤自身による旧論文の改稿をもって論争史における第二の転轍点とみなし、その貢献を評価するものである。一点補足するならば、内藤がヴェーバーの「資本主義の精神」論を意識したかたちで浄土真宗と近江商人の経済倫理に対する研究を深掘りすることは（改稿から10年後の）〔内藤 1978〕以降なかった。大塚による土屋批判は、内藤自身をして旧稿を改稿せしめはした。けれども、結果として近江商人の精神世界を日本資本主義史のなかに位置づける方法的視座へと自己内展開するに至らなかったところに、内藤の限界がある。

II-4 「日本資本主義精神論争」の迷走

本稿ではこれまで、論争史上の二つの転轍点を概観してきた。これら二つの転轍点すなわち大塚の土屋批判そして内藤自身による旧稿の改稿は、皮相に流れるヴェーバーの「資本主義の精神」論を脱線から救い、議論を本筋（本線）に戻そうとする正しい行動ととらえる時、論争史上きわめて重要な位置を占めている。しかし後発資本主義国の好景気や経済的繁栄を「資本主義の精神」ありきで片づけようとするのが当時のトレンドであったためか、木全が書いているように「R・N ベラーなどは日本の近代化と宗教倫理を問題にしているが、これはなにもないところからいかに何かがあるごとくにもものを引き出しているにすぎぬ」〔木全 1976: 170, 二重下線強調引用者〕との所見がどれだけ正鵠を射ていても、あのうわついた風潮をひっくり返すには至らず、影に隠れてしまった観は否めない。

ここで木全の論文「中国人のエトスと儒教・道教」〔木全 1976〕について（網羅的にはな

いが) 敷衍しておきたい。というのは、以下に見るように、筆者が木全のこの論文を今後のヴェーバー研究の健全な発展にとって重要である、と考えているためである。

木全は、「日本人のエトスと儒教の関係はどうなるかといった問題」[木全 1976: 165] によって日本と中国の「儒教」を対比している。たとえば木全はその差異を、体制的および担い手の身分すなわち中国の「儒教倫理の基本は封建的であるよりもむしろ家父長的であった。{中略} 徳川期の幕藩制は封建制であった」[木全 1976: 169, { } 引用者] こと、および「中国の官吏および官吏候補者である読書人身分に当たる身分は日本になかった」[木全 1976: 170] ことにみている。また木全は(前述の)ベラーに対し「[報恩]ということを日本の宗教に関して大きく扱っているが、この報恩自体は、治者にとっては最も都合のよい社会安定化の機能をもち、批判精神を麻痺させる側面をもつ」[木全 1976: 170f.] と指摘している。さらに木全が、日本儒教と中国儒教の顕著な差異について「彼ら {徳川期の儒者} は四書・五経という儒教古典だけに縛られず、諸子をも差別意識なく読んでおり、時には伝統的な儒教説をいつでも相対化する精神活動の自由を保有していた。徳川時代の思想家たちが、鎖国政策と厳重な身分制の制約のもとにあったにもかかわらず、その思想が意外に自由でしばしば独創的でした」[木全 1976: 171, 強調原文, { } 引用者] と書き、「合理化への刺激は、{中略} 藩を主体とした自立性への必要を感じた封建制自体の中にあった」[木全 1976: 172, 強調原文, { } 引用者] と喝破していることは、注目に値する。

木全の言及が、ヴェーバーの「ヒンドゥー教と仏教」中の一文「日本の生活法の「精神」の諸特性は、宗教的契機とは全然別個な事情によってうみだされた {中略}。この事情というのはすなわち政治的および社会的構造の封建的な性格にほかならない」[MWGI/20: 433f.] [古在訳: 398, 強調原文, { } 引用者] を意識したものであることは明白であろう。木全は「儒教と道教」ひいては『宗教社会学論集』におけるヴェーバーの筆致について「異なる宗教体系下のもろもろの生活秩序間の葛藤をこれほど生々しく描き、かつ突きつけうる人は多くないであろう。{中略} 下手な揚棄などしないところに理念型によるヴェーバーの宗教社会学のすさまじいばかりの迫力がある」[木全 1976: 177, { } 引用者] と書いているが、ヴェーバーの真意を正確に見抜いた木全の仕事もまた、論争史に連なる功績として評価されてしかるべきであろう。

在英の日本人経済学者・森嶋通夫も、論争史の論客のひとりに加えられてよい。森嶋は「ヴェーバーの中国研究にはもっと多くの批判が専門家によって提起されうるであろう。しかしヴェーバーが正しいかどうかはここでの問題でない。彼によって提起された問題を日本について考えるのが、以下の課題である」[Morishima 1982: 1] [森嶋 1984: 30f.] とし、また別箇所「ヴェーバーは儒教を日本の主たるイデオロギーと考えなかったためか、[「ヒンドゥー教と仏教」]の日本論の中でも {日本儒教についてはわずかな言及しかしていない}」[Morishima 1982: 2] [森嶋 1984: 31, { } 引用者] と書き、儒教的資本主義論に対して若干の含みを

持たせた。この時期、当該論争は文字通り迷走していたのである。

II-5 論争史上第三の転軸点 富永健一による論点の整理（1990年前後～1998年頃）

ここでは論争史上第三の転軸点を取りあげる。富永の業績は現代日本の社会学全般にとって絶大なものがあり、かりに当該論争とかかわりのある富永の仕事の一部を挙げるだけでも、「ヴェーバーと中国および日本の近代化」（〔富永 1988〕）、『日本の近代化と社会変動』（〔富永 1990〕）、『近代化の理論』（〔富永 1996〕）、『マックス・ヴェーバーとアジアの近代化』（〔富永 1998〕）と枚挙にいとまがない。これらのなかにはもちろんヴェーバーの「資本主義の精神」論も含まれている。

本稿は富永の近代化論における社会学的功績⁽¹⁷⁾を網羅するものではないが、素描の域を出ないとはいえ、本稿の題目に照らし富永の言説で重要な項目を4つ挙げておきたい。1つめは、近代化理論における四領域（①経済 ②政治 ③社会 ④文化）の定式化である。富永は書いている。

「ここでいう意味での近代化理論は、しばしば発展理論（development theory, *Entwicklungstheorie*）という名によっても呼ばれている。この意味からは、本書で近代化を、経済的近代化・政治的近代化・社会的近代化・文化的近代化のように分ける時、それらは経済発展・政治発展・社会発展・文化発展などのように呼ばれてもよい。もちろん厳密に定義すれば、近代化は発展一般にたいしては、近代という時代限定をともなった、発展の特殊なケースということになる {後略}」〔富永 1990: 421f., { } 引用者〕

2つめは、既往論争の迷走を踏まえた「資本主義の精神」論の整理である。行論を確認しよう。

「ヴェーバーは、日本が西洋中世と同様に封建制をもった歴史的事実をあげて、この封建制のもとでのレーエン関係（*Lehensverhältnis* 封土を介しての主従関係）が、中国の神政政治におけるよりも、西洋の意味での個人主義を日本につくり出すのに好都合であったと論じた。しかしこれは、日本人が西洋人のつくりだした資本主義を比較的受け入れやすかった、という消極的な理由を述べているだけのことであって、日本人が西洋人と同じ資本主義の精神を、自力でつくりだしたということの意味するものではない。{中略} インドはともかくとして、日本と韓国、そうして華僑資本によって一体化されつつある中国・台湾・香港・シンガポールにおいて、非西洋的資本主義が強力に発展しつつある現在の状況をもしヴェーバーが見たとしたら、彼は少しも驚かず、「それらの資本主義は外からの完成品としての輸入によるもので、東洋人自身が資本主義の精神をつくりだしたことによって生みだされ

たものではない」と述べたのではないだろうか」[富永 1998: 33f., { } および二重下線強調引用者]。

3つめは、(1項目と部分的に重なりあうが)中国と日本の「家 jiā/イエ」⁽¹⁸⁾への着目と、両者の識別・比較である。富永は、中国の伝統家族が時として兄弟姉妹とその子孫ら数世代の同居からなる大家族を形成する一方、日本の伝統家族が嗣子^{しし}(おおむね長男、ごくまれに末子)のみ親と同居し、中国のような大家族を形成することが稀であったことを指摘した [富永 1988: 134ff.]。

4つめは、「村落⁽¹⁹⁾と都市」(の支配構造)に対する日中両国の特性比較である。これについて富永は「日本の伝統村落は政治権力の支配下に組み入れられており、中国におけるように、村落の自治が上部の政治権力からまったく独立して存続しつづけている、というようなことはなかった」[富永 1988: 140]とした。

以上、富永の業績における重要な言説として1~4項目をたてつづけに挙げた。われわれはここに、ヴェーバーの「資本主義の精神」をめぐる既往論争(の迷走)が、富永の論点整理により見事に収斂に導かれていることを感得できる。

本稿は、この富永の仕事をもって論争史上第三の転軸点とみなし、その貢献を高く評価するものである。

III 論争の到達点と課題

論争史をとおしてみると、ヴェーバーに対するとんでもない誤解が、富永の仕事をはじめ佐藤(1990)や小笠原(1994)、滝沢(1996)等によりにわかに「図式主義」[富永・立野訳折原補訳: 249]あるいは「似而非ヴェーバー主義」[野崎 2005: 326]としてクローズアップされ、「俗流ヴェーバー批判を駆逐する」[野崎 1998: 106]という正当な目的のもとで軌道が本格的に修正されてゆくのは、なんと1990年代から——[内藤 1941]から約50年後!——のことである。後年、その駆逐効果が観面^{てきめん}にあらわれた好例を引こう。専門は経済学だが社会学にも通暁していた小室は、次のように書いている。

「{ヴェーバーが「儒教と道教」で中国の宗教からは資本主義の精神がでてこなかったと結論づけた行論の後} さて、ここで気になるのが「日本ではどうなのか」という事である。一応、日本は資本主義国という事になっている。だが、ヴェーバーが指摘した「資本主義の精神」が日本でも実現されているかと聞かれたら、答えは断じてノーである⁽²⁰⁾」[小室 2004: 151, { } および二重下線強調引用者]。

誤解する余地のない小室の筆致は、とりもなおさず 1990 年代の研究者たちの仕事が適合性かつ有効性を備えていた証左にほかならない。しかし、効果的と思われた軌道修正によっても、経済発展の要因をなにがなんでも「資本主義の精神」から演繹したがる手合いの「馬鹿げた空論 *töricht-doktrinäre These*」[MWGI/18: 255] [梶山訳安藤編：168] は、いまなお根絶されるには至っていない。最直近の業績から曾の一例⁽²¹⁾を引こう。「マックス・ヴェーバーは、中国において儒学は資本主義の経済発展を妨げたという観点を提起した。ところが、彼の言説より約半世紀の後、日本は奇跡的な経済発展という事実をもって彼のその考えに反駁した」[曾 2019: 16f.]。

戸田も曾同様ヴェーバーに対する同様の誤解を払拭できないでいる。戸田は書いている。

「ヴェーバーが「儒教と道教」と「ヒンドゥー教と仏教」の両論考で行なったのは、それぞれ中国とインドで資本主義の自生的発展が見られなかったのはなぜか、という問題をめぐる議論であり、両者がその後、外圧に適応する形で（言い換えれば、後発国として）資本主義を受容して、そののち資本主義的経済発展を遂げたということは、少なくとも論理的には、資本主義の自生的発展の欠如と矛盾するわけでは必ずしもない。{中略} 少なくとも筆者自身は、100 年前に「儒教と仏教」→「儒教と道教」と「ヒンドゥー教と仏教」を著したヴェーバーが仮に今日復活して中国とインドの現在の状況を目にしたなら、自らの 100 年前の所説の妥当性の如何について今一度深く再考したであろうことを疑わない」[戸田訳 2019: 335f., 二重下線強調および {} 引用者]。

戸田がここで、富永の指摘した輸入品としての資本主義の問題を軽視していることは明らかであろう。

本稿は、いまなおわが国で——おそらく海外でも——ヴェーバーの「資本主義の精神」が誤解されている原因を探るべく、「日本資本主義精神論争」に焦点をあてて議論を進めてきた。論争をたどる過程でわかったことは、ヴェーバーを誤読しそれを拡散した要因が、次の諸論考すなわち——内藤自身にその意図は毫もなかったのだが——内藤論文（1941）に依拠したベラー論考（1957）、土屋論考（1964）、そしてベラー論考の邦訳（1966）にあると考えられる、ということであった。

また本稿での議論を通して成果も得られた。それは、第一に土屋論考（1964）に対する大塚の批判（1964/1965）を、第二に内藤自身による旧稿（1941）の改稿（1968）を、第三に富永の近代化理論他（1990 年前後～1998 年頃）を、論争史における画期的な転軸点としてそれぞれ位置づけた点である。

さらにこれらの転軸点は、次の理由のもとに、論争史上の貢献をなしたものとして評価される。

第一に大塚の土屋批判が即時的——土屋論考の同年のうちに！——になされた点である。大塚の鋭い指摘は、脱線気味な「資本主義の精神」論に見直しを促すきっかけをつくった。

第二に内藤が自身の戦前の論文を改稿した点である。内藤の改稿は、大塚による土屋批判の正当性を更に補強するのに一役買った。ただ内藤の研究者人生において、自身で旧稿を改稿したことの意味や位置づけをさらに問うにあっては、旧稿と改稿の照合のもとに、両者を一旦解体し再構成する作業が必須となろう。

第三に富永がこれまでの論争に軌道修正をはかる舵取りの役割を果たした点である。富永の論考(複数)は、複雑に絡みあっていた論点を整序し、論争をおおきく収斂に導いた。

富永の貢献はともかく、とりわけ大塚と内藤のそれは、論争史をとおしてこれまで正当に評価されてきたとはいえない。しかし、いみじくも当該論争の水準が久しくヴェーバーの「資本主義の精神」論に対する根本的な誤謬を排除できる地平に到達しているにもかかわらず、そうした誤謬の再発を根絶やしにするまでには現状至っていない。

これに対し本稿は、現時点で十分な回答ないし恒久的な解決策を持ち合わせているわけではないが、ここで課題もみえた。ひとつは、本稿が日本人研究者による貢献に主眼を置いたため、ベラーを除く海外研究者による先行研究事例⁽²²⁾を対象外としたことである。いまひとつは、本稿が『宗教社会学論集』に軸足を置きすぎたことである。ヴェーバーの主著を『学問論集 *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*]『経済と社会 *Wirtschaft und Gesellschaft*]『宗教社会学論集(全三卷) *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie (Bde.1-3)*]』とすることにおおむね異論はなかろう。が、3 著の「相互補完関係」[折原 2022: 324]に即してヴェーバーの「資本主義の精神」をとらえなおすという観点は、本稿では断念されている。もっとも、世良晃志郎^{せらてるしろう}の訳業による『支配の社会学』『支配の諸類型』『法社会学』が、「世界諸宗教の経済倫理」シリーズの読解にあたっての欠くべからざる「水先案内」であることは、野崎が指摘しているとおりである [野崎 2005: 266]。

「日本資本主義精神論争」の歴史は、一面においてヴェーバーの邦訳業と密接にかかわっている。だがもしヴェーバーに対する誤解や誤読——そして誤訳まで含むと——がなかったとしたら、当該論争の様相は、現在われわれが眼にしているものとは全く違うものになっていたかもしれない。

IV 結 論

筆者は、マリアンネがヴェーバーの伝記のなかで書いた次の言葉に首肯する場面に出くわすことが往々にしてある。

「けれどもやはりこれ {ヴェーバーの著作から抜き出して来たもの} も、さざめく泉から

水を汲んだ盃にすぎない。いかにも盃の水は泉から汲んだものだ。しかし泉の真の姿は盃のなかには無い」[LB1: 318] [LB2: 346] [新装大久保訳：242, } } 引用者]。

われわれは、好むと好まざるとにかかわらず、今後も「駆逐」作業の必要性に迫られることになるのであろうか。少なくとも「倫理と精神」が社会（諸科）学の古典の一冊であり続ける限り、「似而非ヴェーバー主義」に出くわすリスクがツネにつきまとうことは想像に難くない。だが、そうはいいつつも、これを憂え放置してばかりもいられない。事態がどうあれ——ヴェーバー自身にしてみれば寝耳に水かつナンセンス極まりない話なのだが——、異常を異常として認識し、地道にかつ果断に繰り返^{ただ}し、このましからぬ事態を打開していくことこそ、ヴェーバーに学ぶ者すべてに与えられる責務であろう。

【注】

- (1) ヴェーバーは「倫理と精神」（原論文 1904/5；改訂論文 1920）において「資本主義の精神 *der Geist des Kapitalismus*」という用語を使用しつづけた。その理由のひとつは、ヴェーバーおよびエドガー・ヤッフエ（Edgar Jaffe）と同様『社会科学・社会政策雑誌』の共同編纂者であったヴェルナー・ゾンバルト（W. Sombart）が『近世資本主義 *Der moderne Kapitalismus*』（1902）を著したさい、「資本主義（的）精神 *der kapitalistische Geist*」という用語を使用し、かつ資本家をそうした精神の担い手と主張していたことと深く関係している。ヴェーバーは自身の用語をただたんに „*der kapitalistische Geist*“ とすることもできたはずだが、あえて „*der Geist des Kapitalismus*“（と 2 格／属格表記）でととした。行論上、「資本主義（的）精神 „*kapitalistische Geist*“」の用語を使わざるを得ない場合でも、ヴェーバーは「勿論ここでも我々が仮定した意味で *immer in dem provisorisch hier verwendeten Sinn dieses Wortes*」[MWGI/18: 256] [梶山訳 安藤編：168] と条件留保している。これは、ヴェーバーが担い手として資本家だけでなくいわゆる「中産の生産者層」[大塚 1966: 127]をも想定していたことや、（方法論的個人主義をとる関係上）担い手階層の個人レベルに内包されている宗教的気質に重点を置いていたことなどから、ゾンバルトとの差異を鮮明に打ち出す必要があったのであろう [大塚 1977: 119ff.]. ちなみにドイツ社会学の成立過程を丹念な歴史文献の解説とともに解き明かした先行研究に Shirō Takebayashi, 2003, *Die Entstehung der Kapitalismustheorie in der Gründungsphase der deutschen Soziologie: Von der historischen Nationalökonomie zur historischen Soziologie Werner Sombarts und Max Webers*, Berlin: Duncker & Humblot（＝田村信一 山田正範訳『歴史学派とドイツ社会学の起源－学問史におけるヴェーバー資本主義論－』ミネルヴァ書房 2022 年）がある。なお「倫理と精神」（原論文）を機にドイツ本国で勃発した「資本主義精神起源論争」（大塚久雄）については、拙稿で一瞥した [川口 2023. 3]。
- (2) 「ヒンドゥー教と仏教」の主な抄訳には以下がある。杉浦宏譯 中村元補註『世界宗教の経済倫理 II ヒンズー教と佛教（1）宗教社会学論集第三』（みすず書房 1953 年）、池田昭・山折哲雄・日隈威徳訳『アジア宗教の基本的性格』（勁草書房 1970 年）、世良晃志郎訳『支配の諸類型』（創文社 1970 年、125-129 頁）、野崎敏郎「カール・ラートゲンの日本社会論と日独の近代化構造に関する研究」（平成 15 年度～平成 16 年度科学研究費 補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書 2005 年、266-269; 274ff.）
- (3) この用語は野崎の先行研究「日本人の商業道徳と黄禍論－日本資本主義精神論争への忘れられた前哨－」（[野崎 2000]）から頂いたもので、外形上類似しているいわゆる「日本資本主義論争」とは

全くの別物である。当然両者は思想的背景と方法論とを異にしており、前者（日本資本主義精神論争）はヴェーバーとその方法論を、後者（日本資本主義論争）はマルクス＝レーニン主義をそれぞれ出発点としている。後者については小山弘健『日本資本主義論争史 上下』（青木文庫 1953年）が詳しい。

- (4) これについては、折原浩が「羽入－折原論争」との関連で詳細に論じており、折原浩『ヴェーバー学のすすめ』（未來社 2003年）、折原浩『ヴェーバー学の未来「倫理」論文の読解から歴史・社会科学の方法会得へ』（未來社 2005年）、折原浩『学問の未来 ヴェーバー学における末人跳梁批判』（未來社 2005年）、折原浩『大衆化する大学院 一個別事例にみる研究指導と学位認定』（未來社 2006年）を参照されたい。
- (5) これについて折原は、『マックス・ヴェーバーとアジア 比較歴史社会学序説』（平凡社 2010年）において持論を展開している。ちなみに当該書は、2009年に名古屋大学で行われた「日中社会学会」第21回年次大会での自身の講演「マックス・ヴェーバーの比較歴史社会学における欧米とアジアとくに中国」を元に増補改訂されたものである〔折原 2010: 7〕。
- (6) [Käsler 1979: 262ff.] [森岡訳 1981: (28) ff.]
- (7) 教会史家・教義史家の E. ベンツは次のように書いている。「教会に属さない多くの人々がほんとうのキリスト教徒であり、それどころかキリスト教以外の宗教を信じる人たちのなかにもキリスト教のもつ宗教的な価値をきわめて深く理解している人たちが多数いる」[Benz 1993: 4] [南原訳 1997: 13]。ベンツはここでヴェーバーの「資本主義の精神」論を全く想定していない——自身のテーマとの関連でジョン・ウェズリーへの言及が見られる——のだが、この一文が「日本におけるピューリタニズムの「機能的等価物 [functional equivalents]」」[Bendix and Roth 1971: 194] [柳父訳 1975: 262, } } 引用者]として拡大解釈され排他的にひとり歩きする時、「似而非ヴェーバー主義」[野崎 2005: 326]の恰好的になるおそれがあることを強調しておきたい。
- (8) 本稿では紙数の関係上割愛せざるを得ないが、1920年代から1930年代の代表的な関連文献——直接的な論争ではなくとも、管見では論争史の系譜に入れることのできる文献——として、以下が挙げられる。圓谷弘『我國資本家階級の發達と資本主義的精神』（三田書房 1920年）、西田直二郎『日本文化史序説』（改造社 1932年）。ちなみに1938年には梶山訳「倫理と精神」が、1940年には細谷訳「儒教と道教」がそれぞれ出版され、日本のヴェーバー受容の一翼を担った。日本のヴェーバー受容に関する先行研究の一例として、Wolfgang Schwentker, 1998, *Max Weber in Japan. Eine Untersuchung zur Wirkungsgeschichte 1905-1995*, Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck) (=野口雅弘・鈴木直・細井保・木村裕之訳『マックス・ウェーバーの日本 受容史の研究 1905-1995』みすず書房 2013年)、三笠利幸「日本における『倫理』受容についての一考察」『日本マックス・ウェーバー論争「プロ倫」読解の現在』（ナカニシヤ出版 2008年 218-244頁所収）、三笠利幸「『価値自由』論の系譜 日本におけるマックス・ヴェーバーの受容の一断面」（中川書店 2008年）がある。なお日本におけるヴェーバー書誌については、天野敬太郎編『日本マックス・ヴェーバー書誌 第二版』（新泉社 1972年）が1970（昭和45）年12月までに発表されたものを網羅している。
- (9) 当時日本は日露戦争（1904/5）に勝利したとはいえ、欧米列強のアジア進出に対する牽制としていかに国力（生産力も然り）を充実させてゆくかが課題であったから、河田はこの歴史状況を少なからず意識していたのかもしれない。
- (10) ここで内藤は、大塚による書評「エルンスト・バインズ著『1560-1650年のネーデルラントにおけるカルヴァン派教会の経済倫理』」（『経済学論集』第3巻、第11号）への参照を指示している〔内藤 1941: 283〕。なお大塚のこの書評は、『大塚久雄著作集第8巻』に収録されている〔大塚 1969: 505-511〕。
- (11) 例え ば①Dore, Ronald, 1987, *Taking Japan seriously, a confucian perspective on leading*

economic issues, Stanford: Stanford University Press. ②Little, Reg, and Reed, Warren, 1989, *The Confucian Renaissance, origins of Asia's economic development*, Sydney: The Federation Press. ③Vogel, Ezra, 1991, *The four little dragons*, Cambridge: Harvard University Press. ④Vahlefeld, Hans, 1992, *Japan. Herausforderung ohne Ende*, Stuttgart: Deutsch Verlags-Anstalt が挙げられる。

- (12) この点については、[野崎 2005: 326] から多くの示唆を受けている。なおこの大塚論文は、1943年から1946年にかけて3回にわたって不定期に連載されながら未完に終わった自身の論文、「マックス・ウェーバーに於ける資本主義の『精神』—近代社会における経済倫理と生産力 序説」(1)/(2)/(3) が原型となっている。後注(13)(14)も参照のこと。
- (13) 本文で引用した箇所以外にも、大塚の土屋批判は同論文中に点在している。[大塚 1965. 1: 55, 62] も参照。
- (14) 1964年は東京五輪が開催された年であると同時に、ヴェーバー生誕百年シンポジウム（12月5日～6日）が開催された年でもある。シンポジウムの成果をまとめた大塚久雄他『マックス・ヴェーバー研究』（岩波書店 1965年）の出版に際して、大塚の論文「マックス・ヴェーバーにおける資本主義の「精神」」も収録された。元原稿はいちおう——初出とはいわず——[大塚 1964. 10] [大塚 1965. 1] にあたる。大塚の業績に関する先行研究の一例として、直近では恒木健太郎「『思想』としての大塚史学 戦後啓蒙と日本現代史」（新泉社 2013年）がある。
- (15) ベラー論考の邦訳（1966）にあたって丸山真男が書評を寄せ、そこでベラーの立論における「ミスリーディングな結論」[堀・池田訳 1966: 354]を生む可能性を指摘している。内藤には丸山の書評に思い当たるふしがあったのであろう。
- (16) 小谷（三浦）によると1941年当時内藤は25歳位で、東京帝国大学文学部を卒業したその翌年に当たる。一方、改稿時内藤は52歳位で、九州大学文学部で教授をつとめていた [小谷（三浦）2021: 99]。[内藤 1968] はさらに推敲が加えられ、[内藤 1978] として公刊されるに至る。
- (17) 筆者はかつて修士論文において、以下4点の定式化を、富永の功績としてまとめたことがある。すなわち①近代化のための客観的条件、②近代化のための主体的要因、③コンフリクト（*conflict*, *Konflikt*, 衝突）の所在、④発展の跛行性である。
- (18) 日本の「家／イエ」については、小笠原による関連文献のレビューがある [小笠原 1994: 164-247]。
- (19) 封建的日本の村落構造については、野崎がヴェーバーの「ヒンドゥー教と仏教」の日本論を抄訳し、それにコメントルを付け加えるかたちで詳細な研究をおこなっている [野崎 2005: 294ff.]。
- (20) 小室は大阪大学大学院生時代、森嶋通夫の門弟であった。森嶋は、[Morishima 1982: 1f.] [森嶋 1984: 30f.] [本文参照] 以外にも、「日本的な儒教教義の解釈の下で資本主義が興隆したように、儒教という「消極的な意味での合理的精神」の下でも、資本主義が興隆することはありうる。もしこのように考えるならば、教義の解釈が少し変われば、世俗倫理がどのように影響されるかという「不安定性定理」の検討は、キリスト教の場合と同様、儒教についてもなされるべきである」[森嶋 1994: 130f.] とも書いたことがあるが、小室のこの言説は、実質上、師匠である森嶋の所見に対する応答にもなっている。
- (21) これについて、米国の代表的な先行研究として次を挙げておきたい。出版年順に Marius B. Jansen ed., 1965, *Changing Japanese Attitudes Toward Modernization*, Princeton: Princeton University Press (=細谷千博編訳『日本における近代化の問題』岩波書店 1968年) (1/6), William W. Lockwood ed., 1965, *The State and Economic Enterprise in Japan*, Princeton: Princeton University Press (=大乗佐武郎監訳『日本経済近代化の百年—国家と企業を中心に—』日本経済新聞社 1966年) (2/6), Ronald. P. Dore ed., 1967, *Aspects of Social Change in Modern Japan*. Princeton: Princeton University Press (3/6), Robert E. Ward ed., 1968,

Political Development in Modern Japan, Princeton: Princeton University Press (4/6), Donald H. Shively ed., 1971, *Tradition and Modernization in Japanese Culture*, Princeton: Princeton University Press (5/6), James W. Morley ed., 1971, *Dilemmas of Growth in Prewar Japan*, Princeton: Princeton University Press (=小平修 岡本幸治 監訳『日本近代化のジレンマ 両大戦間の暗い谷間』ミネルヴァ書房1974年) (6/6). これらは *Studies in the Modernization of Japan* シリーズの全6巻である。

- (2) 曾の主張については、つとに三笈が曾のヴェーバーに対する誤解を指摘している [三笈2020: 9: 77f.]。

[参考文献]

- Bellah, Robert, 1957, *Tokugawa Religion. The Cultural Roots of Modern Japan*, New York: The Free Press. (=堀一郎・池田昭訳1966『日本近代化と宗教倫理－日本近世宗教論－』未來社)
- Bendix, Reinhard, and Roth, Günther, 1971, *Scholarship and Partisanship, Essays on Max Weber*, Berkley & Los Angeles: University of California Press. (=柳父園近訳1975『学問と党派性』みすず書房)
- Benz, Ernst, 1993, *Beschreibung des Christentums: eine historische Phänomenologie*, Stuttgart: Klett-Cotta. (=南原和子訳1997『キリスト教その本質とあらわれ』平凡社)
- Käsler, Dirk, 1979, *Einführung in das Studium Max Webers*, München: C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung (Oscar Beck). (=森岡弘通訳1981『マックス・ウェーバー その思想と全体像』三一書房)
- Morishima, Michio, 1982, *Why has Japan 'succeeded'? Western technology and the Japanese ethos*, Cambridge: Cambridge University Press. (=森嶋通夫 1984『なぜ日本は「成功」したか? 先進技術と日本の心情』TBS プリタニカ)
- LB1: Weber, Marianne, 1. Aufl., 1926, *Max Weber ein Lebensbild*, Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck).
- LB2: Weber, Marianne, 2. Aufl., 1950, *Max Weber ein Lebensbild*, Heidelberg: Verlag Lambert Schneider.
- MWGI/18: Weber, Max, herausgegeben von Wolfgang Schluchter, in Zusammenarbeit mit Ursula Bube, 2016, *Max Weber Gesamtausgabe, Abt. I, Band 18*, Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus; Die protestantischen Sekten und der Geist des Kapitalismus, Schriften 1904-1920, Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck).
- MWGI/19: Weber, Max, herausgegeben von Helwig Schmidt-Glintzer, in Zusammenarbeit mit Petra Kolonko, 1989, *Max Weber Gesamtausgabe, Abt. I, Band 19*, Die Wirtschaftsethik der Weltreligionen. Konfuzianismus und Taoismus, Schriften 1915-1920, Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck).
- MWGI/20: Weber, Max, herausgegeben von Helwig Schmidt-Glintzer, in Zusammenarbeit mit Karl-Heinz Golzio, 1996, *Max Weber Gesamtausgabe Abt. I, Band 20*, Die Wirtschaftsethik der Weltreligionen. Hinduismus und Buddhismus, Schriften 1916-1920, Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck).
- WL7: Weber, Max, herausgegeben von Johannes Winckelmann, 7. Aufl., 1988, *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck).
- 新装大久保訳: 大久保和郎訳 1987『マックス・ウェーバー』みすず書房
- 大塚久雄 1964. 10 「マックス・ヴェーバーにおける資本主義の「精神」(1)」東京大学経済学会編『季刊 経済学論集』第30巻第3号, 1-15頁所収

- 大塚久雄 1965. 1 「マックス・ヴェーバーにおける資本主義の「精神」(2・完)」東京大学経済学会編『季刊 経済學論集』第30巻第4号, 40-70頁所収
- 大塚久雄・安藤英治・内田芳明・住谷一彦 1965『マックス・ヴェーバー研究』岩波書店
- 大塚久雄 1966『社会科学の方法-ヴェーバーとマルクス-』岩波新書
- 大塚久雄 1969『大塚久雄著作集第8巻 近代化の人間的基础』岩波書店
- 大塚・生松訳:大塚久雄 生松敬三訳 1972『宗教社会学論選』みすず書房
- 大塚久雄 1977『社会科学における人間』岩波新書
- 大塚単独訳:大塚久雄訳 1988/1989『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店／文庫
- 小笠原真 1994『近代化と宗教 マックス・ヴェーバーと日本』世界思想社
- 小谷(三浦)典子 2021『内藤莞爾の社会学——九州大学文学部社会学研究室の窓から——』学文社
- 折原浩 2010『マックス・ヴェーバーとアジア 比較歴史社会学序説』平凡社
- 折原浩 2022『マックス・ヴェーバー研究総括』未来社
- 梶山訳安藤編:梶山力訳 安藤英治編 1994『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の《精神》』未来社
- 川口順 2023. 3 「資本主義精神論争史に関する批判的一考察-M. ヴェーバー「(近代)資本主義の精神」概念の解釈をめぐって-」『佛敎大学大学院紀要』社会学研究科篇 第51号, 19-36頁所収
- 河田嗣郎 1910『資本主義的精神』京都法學會
- 木全訳:木全徳雄訳 1971『儒教と道教』創文社
- 木全徳雄 1976「中国人のエトスと儒教・道教」金子武蔵編『マックス・ウェーバー 倫理と宗教』以文社, 163-182頁所収
- 古在訳:古在由重訳 2009『ヒンドゥー教と仏教 宗教社会学論集 II』大月書店
- 小室直樹 2004『経済学をめぐる巨匠たち』ダイヤモンド社
- 佐藤俊樹 1990「儒教とピューリタニズム」再考-ウェーバーの比較社会学に対する批判的一考察-」『社会学評論』第41巻1号, 41-54頁所収
- 曾暁霞 2019『日本における近代経済倫理の形成』作品社
- 滝沢秀樹 1996『歴史としての国民経済』お茶の水書房
- 土屋喬雄 1964『日本経営理念史 日本経営哲学確立のために』日本経済新聞社
- 戸田訳:戸田聡訳 2019『宗教社会学論集(第1巻・上)』北海道大学出版会
- 富永健一 1988. 5 「ヴェーバーと中国および日本の近代化」『思想1988. 5., No.767 特集:ウェーバー・ルネサンス』岩波書店, 120-155頁所収
- 富永健一 1990『日本の近代化と社会変動 テュービンゲン講義』講談社学術文庫
- 富永健一 1996『近代化の理論 近代化における西洋と東洋』講談社学術文庫
- 富永健一 1998『マックス・ヴェーバーとアジアの近代化』講談社学術文庫
- 富永・立野訳 折原補訳:富永祐治・立野保男訳 折原浩補訳 1998『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』岩波文庫
- 内藤莞爾 1941「宗教と経済倫理——浄土真宗と近江商人」日本社会學會編『社会學(第8輯)』岩波書店, 243-286頁所収
- 内藤莞爾 1968「改稿」宗教と経済倫理——浄土真宗と近江商人(私家版)
- 内藤莞爾 1978『日本の宗教と社会』お茶の水書房
- 野崎敏郎 1998. 3 「ヴェーバーの資本主義精神論と明治維新論とにかんする方法的省察-資本主義の創出と移植-」『社会学部論集』第31号(佛敎大学), 105-121頁所収
- 野崎敏郎 2000「日本人の商業道徳と黄禍論——日本資本主義精神論争への忘れられた前哨——」歴史と方法編集委員會編『帝国と国民国家』青木書店, 185-234頁所収

- 野崎敏郎 2005「カール・ラートゲンの日本社会論と日独の近代化構造に関する研究」平成15年度～平成16年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書
- 濱島・徳永はましま訳: 濱島朗・徳永まこと恂まこと訳 1971『現代社会学体系5 ウェーバー 社会学論集 -方法・宗教・政治-』青木書店
- 深沢あふみ訳: 深沢宏あふみ訳 1983『世界宗教の経済倫理II ヒンドゥー教と仏教』日貿出版社
- 深沢改あふみ訳: 深沢宏あふみ訳 2002『ヒンドゥー教と仏教 世界宗教の経済倫理II』東洋経済新報社
- 三笥みとま利幸 2020.9「マックス・ヴェーバーと「近代文化」-『倫理』論文は何を問うのか(5)-」『立命館産業社会論集』第56巻2号, 65-83頁所収
- 森岡ひろみち弘通ひろみち訳 1970『儒教と道教』筑摩書房
- 森嶋もりしま通夫ちゆうお 1994『思想としての近代経済学』岩波新書

(かわぐち じゅん 社会学研究科社会学専攻博士後期課程)

(指導教員: 野崎 敏郎 教授)

2023年9月29日受理